

# ～合同ステージ～

## 二群の合唱団とピアノのための「蜜蜂と鯨たちに捧げる譚詩」

作曲 三善 晃 作詩 白井 かずこ 訳詩 Roger Pulvers

蜜蜂と鯨たちからの信頼を取り戻すために！

客演指揮者 西岡茂樹

コスモポリタンの詩人、白石かずこさんの詩に、日本が世界に誇る巨匠、三善晃先生（1933～2013）が作曲、2001年12月に東京混声合唱団により初演された。2群の混声合唱団とピアノという編成で書かれており、今回は、「奈良女子大学 & 和歌山大学」がA群、「大阪教育大学 & 関西大学」がB群を構成している。

1曲目の「鯨たちに捧げる」は、『地球上の人間と自然の共存』がテーマであり、それを人間界の側からではなく、自然界の側の代表として「鯨」が登場して語り部を演じ、人間の救いを見いだすという構図。鯨たちは、人間が登場する遥か以前の約5000万年も前から海で暮らしており、海の中で遠距離コミュニケーションをしたり、毎年、新しい歌を作曲して歌い、それが仲間の間で流行するという。その生態はまだ人間にとっては未知であるが、少なくとも海の中でドカンと核爆発の実験をする野蛮な生物であるヒトよりは、ずっと気高い生き方をしているに違いない。曲の前半は、2群の鯨が日本語で掛け合いを演じ、後半は、同じ歌詞を今度は英語で一体となって歌う。jazzyなサウンドがとてもお洒落な、秀逸のア・カペラ作品である。

2曲目の「さまよえるエストニア人」は、『地球上の人間同士の共存』がテーマであり、その語り部は、北欧の小国エストニアの詩人、ヤン・カプリスキーである。ヤンが生まれたのは、スターリンとヒトラーが激しく対立していた1941年。北欧の豊かな自然に抱かれて「蜜蜂」を飼っていた家に生まれたヤンは、生後五ヶ月の時、父を失う。父はソ連に連行され、強制収容所で“消えた”あるいは“消された”。その後、一家は家を追われ、シェルターを逃げ回り、やっと戦火が止んだと思ったら、今度は東西冷戦。ヤンに平安が訪れるには、ベルリンの壁が壊れ、エストニアが独立を果たす1991年まで、さらに40年以上の年月が必要だった。このヤンのことを、白石かずこさんは、ワーグナーの「さまよえるオランダ人」にひっかけて「さまよえるエストニア人」と呼んだのだった。曲調は一転し、ピアノの協奏により、シンフォニックで熱い歌声がマグマの如く噴出する！

蜜蜂もまた鯨と同様、太古の昔の約6000万年前から地球に暮らしていた。蜜蜂も鯨も、後から地球にやってきて、僅か数千年の間に地球にはびこり、自然を破壊し、残酷な兵器を使って殺し合いをする「人間」をどんな眼差しで見つめているのだろうか…。

彼らは絶望していない。それを超えて、鯨は“まだ見捨てたモンでもないネ”と呟き、蜜蜂は“帆をたたんじゃいけない 今こそ”とエールを送ってくれる。

21世紀の主演である学生諸君が、ひび割れた地球を前にして、何を思い、何を願い、何を祈るのか、三善先生をこよなく敬愛する浅井道子さんと共に、しかとこの目で確かめてみよう。今、合唱する意味が、そこから立ち昇ってくることを信じて。